
キラキラの彼

小室 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キラキラの彼

【Nコード】

N1235T

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

母子家庭で県立の高校に通いながら、放課後はスーパーのレジのバイトをしている、貧乏な主人公。毎日の楽しみは、登校時に道路の反対側に見かける金持ち学校の、キラキラ格好いい彼。身分違いの片思いをひっそりしていたある日、母親が熱を出して寝込み、家政婦の仕事を代わりに引き受けることに。

一人暮らしの部屋の掃除と料理、住人のいない時にすることが条件

の仕事は、なんと！そのキラキラの彼の部屋の仕事だった。

世の中に光と影があるように、何事も明と暗とで分かれているのは、仕方がない事なのだ。

恵まれているもの、恵まれていないもの、豊かなもの、貧しいもの。美しいもの、醜いもの。

そんなわずかな両極端と、それ以外は、やんわりと大まかに、でも確実に二つに分かれるその他大勢で、この世は成り立っている。

自分がどちらに属しているかは、私はちゃんと分かっていた。

インドやアフリカの道端で暮らす人達のように、極端に貧しいとか恵まれていないとかとは、思わなかったけれど、この豊かな日本において、母子家庭で公立の高校に通う私は、貧しい方に入ると思う。

私が幼い頃に、母親は離婚して、家政婦のような仕事をしながら、私を育ててくれた。2DKの安普請のアパート。階段は今時、外付けの鉄の錆びた階段で、

上ると、カンカンと足音のするものだ。

築30年とも、40年とも言われている。

今時、シャワーが無いのにはびっくりするけど、
かろうじて、お風呂はついているし、

トイレもあるし、家賃も安いので別に不満は無い。

高校2年になる私は、学校が終わるとスーパーのレジのアルバイト
をして、

家計を助けている。

部活をするほどは余裕の無い貧しさだけど、
別に食べるのに困っているわけではないし、

母親も私も健康で、毎日平凡に暮らしている。

それだけで、とても幸せだと思う。

そんな地味な毎日の中でも、

朝の密かな楽しみが、私にはあった。

登校の途中で見かける、

道路を挟んだ向こう側を通る、キラキラを見ること。

キラキラするのは、もちろん象徴的な表現で、

私にとって、光のような存在とも言おうか。

俗っぽく言えば、アイドルみたいな感じで皆の憧れでもある、
彼の姿を見かけるということ。

それは、同じ市内だけれど、尋常でない金持ち子息令嬢が通う、私立の有名学校の制服を着て、朝の登校時に、道路の反対側を友人たちと通る彼の姿を見ることが、私の、何よりもの一日の楽しみだった。

すらりと背が高く、サッカーボールを抱えていたりするから、きっとサッカー部なのだろうか。

肩幅の広い均整の取れたスタイル、短いツンツンヘアは、やんちゃな感じがするけど、とても似合っている。

そして、その整った美しい顔で無邪気に仲間たちと笑いあう。

私の着る紺の地味な県立の制服とは大違いで、
臍脂^{えんじ}のデザイナーズだろうと思われる、そのお洒落な制服のブレザーは、

彼にとっても垢抜けて映えて似合っていた。

住む世界が違うのだと、道路を挟んですれ違う度に思う。
もちろん、彼は私の事なんて振り向きもしないし、きっと知りもしないだろう。
彼はキラキラの世界の住人なのだ。
そして、私は日陰に住む者。

こっそりと道路のこちら側から見つめて、
私は自分の生きる世界を思い知らされてため息をつく。
でも同時に、彼のキラキラに癒されて、
今日も一日頑張ろうと思ったりするのだった。
遠くから、彼を見られるだけで、
私は本当に幸せだった。

ある日、
母親がインフルエンザにかかり、寝込んでしまった。
通いで家政婦をやっている母親の仕事のノルマは、
ほとんどが仲間に振り分けて、消化してもらえたのだけれど、
どうしても、一件都合が合わない件があったらしく、
母親に、スーパーのレジのアルバイトを休んで、
代わってくれと頼まれた。

聞いて見れば、仕事の内容は一人暮らしの人の部屋の掃除と、
惣菜作り。夕食と弁当のおかずとか。
いつも家事の手伝いをしている私には、
別になんてことない内容だ。

「うん、分かった」
私は返事をした。
寝込んでいる母親は、熱で顔を真っ赤にしながら、
ほっと息をついていた。

「でも」
ほっとしながらも、母親は言った。

「部屋の住人とコンタクト取らないでよね。
それがこの仕事の一番の、条件なんだから。
時間指定の住人の留守中に、
さっさと仕事をして、帰って来るんだからね」

私は頷いた。

「なんか、訳ありの人なの」

訊いても、母親は黙っている。

私も別にそれ以上は聞き出さなかった。

今思えば、もつとちゃんと相手がどんな人なのか、
母親に聞き出していたら、良かったのかと思う。

いや、どうだろう。

全て、聞き出していたら、
何か変わったんだろうか。

私には、良く分からない。

学校が終わり、スーパーのバイトに連絡を入れて休み、母親の仕事の代理を勤めに、午後、夕方早い時間、指定された住所に行く。

そこは、見上げるとクラツと眩暈がしそうな、超高層マンション。

季節は初春。

普段の母親の格好を真似して、ジーンズとトレーナーの上に白い割烹着、頭に割烹着とお揃いの白い三角巾を被った私は、建物を見上げて、あぐり口を開けていた。手には食事の支度用に、買い物をしてきたスーパーの袋が下がっている。

こんな場所に住める人種は、とてつもない金持ちしかない。

私は呆れたように頭を左右に振りながら、入り口の暗証ボタンを押した。

母親に教えてもらっていた、パス番号だ。

チュワーンと音がして、
入り口の扉が開く。

なんか、どこか別世界に通じる入り口に入るような気分で、
少しびくつきながら、

私は持ってきたマスクを顔にかけて、中に入ってしまった。
一応未成年だとはれないようにだ。

割烹着着た女子高生ほど、怪しいものはないし。

中に入ると、そこはどこかのホテルのロビーのように広いホールで、
エレベーターも何基もあり、どれに乗っていいのか迷ってしまう。

白い割烹着姿でうろつろとしながら、
青い制服姿の警備員にじろりと見られると、
家政婦の会から貰っている身分証明を見せて、
降りる15階の住人の苗字を言い、私は何とかエレベーターの一つ
に乗れた。

広いエレベーターの中は全面鏡張り。
嫌でも、自分の容姿が目に入ってくる。

小柄と言えば聞こえはいいけど、
要は、ちびだ。

今時、若者に八頭身が多いこの時代に、
150センチそこそこしかないなんて。

「お母さんは160センチあるのになあ」
独り言をつぶやいて見る。

ということは、父親という人がよほど背が低かったのか。
会ったことはないので、定かではないのだけれど。
売っている既成の服も、体に合うものが少なくて、
背が低くて良いことなんて、ほんとうにありやしない。

肩までの黒い髪、おうとつの少ない顔、
今時ではないという特徴の他には、
本当に何の表現もしようがない平凡さ。
でも、二目と見られない顔というわけでもないから、
贅沢は言わないようにしようと思っている。

しかし、それにしても。

目の前の鏡の中の自分を見て思う。

割烹着に三角巾は、我ながら、
よく似合うと思う。

こうして、マスクで顔を隠してしまえば、

まるきりどこぞのおばちゃんだ。
女子高生になんて、到底見えやしない。

私はため息をついた。

でも、これが現実なのだ。

私、佐伯^{さえき}ちず。小さいおばちゃん女子高校生。
手に持ったスーパーの袋がよく似合う。

あの彼が住む、

道路の向こう側のキラキラの世界では、

到底、生きていけない種類の人間なのだ。

15階で降りる。

部屋の番号を書いてある紙を取り出して、部屋を探す。

廊下の床も毛足の長いカーペットが敷いてあり、

ごみくず一つ落ちていないのは見事だった。

「どこかのホテルみたい」

自分家のぼろいアパートに比べると、

まるきり生活感の無い空間に、私はある意味感心していた。

持ってきた鍵をバックから取り出して、

部屋の前に立って眺める。

特殊な形の鍵だ。

貧乏ぼろアパートの鍵とは、根本的に見た目も作りも違う。

きつと、簡単には複製出来ないようにでもなっているんだろう。

しかし、知らない人の家の中に招かれるということは、
(それも留守中！)

本当に信用が無いと出来ない事だよなと思う。

それだけ、母親がこんだけの信用を積む仕事を、
確実にこなして来たということなのだろう。

女手一人で私を育ててくれている事もそうだけれど、
本当に母親は偉いと思うし、私は心から尊敬している。
だから、母親の期待には出来るだけ答えたいと思うし、
自分の力の及ぶ限り、何でも手伝いたいと思う。

がちゃりと鍵を回して引くと、

重厚な感じの厚いドアは音もなく開いた。

「お邪魔しまーす」

住人は不在だと聞いていたから、誰がいるわけでもないのだろうけれど、

部屋の中を覗いて声をかけてから中に入る。

後ろ手でドアを閉めると、私は辺りを見回した。

まず目に付いたのは、玄関先のスニーカーと運動靴。

男の人の物なのは、サイズから見分かる。

あえてシューズボックスを開けたりはしないけど、

住人は思ったよりも若い人なんだろうかと、私は思った。
でも、こんな高級マンションに住み、

家政婦を雇える余裕のある人だ。

今流行のスーツを着ない起業家だとしても、20代後半から30代
だろうよな、

などと考えながら、私は自分の靴を脱ぐときちゃんと揃えて、
玄関の中に入っていた。

顔を見られる事もなくなったので、
マスクは外してポケットにしまった。
息苦しくてかなわない。

そろそろと部屋の中に入る。

他所様のプライベート空間だ。

なるべく必要以上に見ないようにしてと思っても、
掃除と食事作りを頼まれていれば、
そんなわけにもいかない。

クリーム色の壁、濃いベージュの床。

大きな窓から差し込む15階の明るい日差しが、
部屋の中に柔らかく差し込んでいた。
とても居心地のいい部屋だと思った。

目だった乱れもなく、几帳面な人が住んでいるのがわかる。

母親のメモを読み、掃除機のある場所から掃除機を取り出し、
私は丁寧に部屋の中にかけていく。

部屋はフローリング仕立てのキッチンとリビングと、
寝室というシンプルな造りのようだった。

一人暮らしなら、十分な広さだろう。

これだって相当な家賃を、毎月払っているに違いない。

テレビにソファ、

寝室にはベッドとデスク。

特に装飾品などは見当たらない。

実用的でシンプルな生活が好きな人のようだ。

ただ壁に一枚の大きな写真が飾ってあった。

どこか外国。

古い街並み。ずらりと人が並んでいて、

その人の誰もが皿を手に持っていた。

食事でも配っている写真なのだろうか。

私は首を傾げて写真を見上げたけれど、

深くそれ以上は考えなかった。

掃除機をかけ終わり、科学モップで目に付くところを、
手当たり次第、ほこりを除いていく。

トイレ、お風呂も丁寧に掃除をした。

でも、もともとが綺麗好きな人のようなので、
とても楽な仕事だ。

部屋のすべての床も丁寧に乾いた雑巾で乾拭きした。
最後にテーブルを綺麗に拭いて、掃除は終了となる。

そして次のミッション。

食事の用意だ。

私はキッチンにたたずんで、少し考える。

といつても、材料は買ってきてしまっているから、
今更メニューの変更は難しいのだが、

ただ、料理を作る志向として、

母親と私には大きな違いがあったのだった。

母親は今時の母親らしく、

洋食を作るのを得意とする。

つても、プロフェッショナルなものではなくて、

ハンバーグとかパスタとか、

シチューとかポピュラーな家庭料理の範囲での洋食。

母子家庭で育った私は、

良く幼いころに母親の実家であるところの、

田舎の祖母の家に預けられる事が多かったので、

そこで食べた味に非常に愛着があったのだ。

だから普段でも、野菜などの煮物などが一番好きで作るのだけれど、
果たして、それをそのままこのお客さんの家で作ってもいいもんだ

ろうかと、

そんな事を思ったりしていたのだった。

でもまあ、今はコンビニなんかでも、野菜の煮物なんかを、一人分づつ小分けにして売ってるくらいだから、

需要はあるんだろうなと、開き直って、

私はスーパ―の袋に手をつ突っ込むと、サトイモの袋を取り出した。

その時だった。

自分が入った後、鍵をかけたはずの玄関のドアががちゃりと音を立てたのを聞いた。

私はハッと顔を上げる。

住人のお客さんは、まだ帰ってくる時間ではないはずだ。

腕時計を見ると、午後4時45分。

会社などが終わるにしては、まだ早い時間なのは間違いない。

一体、誰だ。

心の中に緊張が走る。

泥棒？でも、家政婦会の言うとおりに、

自分が家に入った後は、鍵はちゃんとかけたのに。

泣きべそをかきそうになりながら、

私は掴んだサトイモの袋を放り出すと、

ポケットからマスクを取り出して顔につけた。

その辺にあつたオタマを手につくと、

キッチンからそろそろと出て行き、

玄関の方を覗き見る。

玄関先に、かがんで靴を脱いでいる一人の人の姿があった。
そして、その人は私の気配に気がつく顔と顔を上げた。

「ああ、いつもご苦勞様」

割烹着の私を見つけて微笑んだその声は、
とても柔らかく穏やかだった。

私は自分が目にしたその人の姿に、
全身が硬直するのを感じる。

臙脂^{えんじ}色の、あの超お金持ち学校の制服。

ツンツンヘアで、すらりとした背の高いその姿。

黒目がちな切れ長の瞳。

片方の肩に、教科書が入っているだろうリュックをひっかけている。

道路という名の天の川の向こう、
あのキラキラの世界に住んでいる、
私はずっとずっと憧れていた彼が、
そこで、私を見て微笑んでいたのだった。

しばらく彼に見入って、そしてハッと我に返ると、私は慌ててキッチンに駆け込み、大きく深呼吸をする。

落ち着け、ちず。

今、私は家政婦のおばちゃんだ。

お母さんの代わりに仕事に来ているんだ。
それらしく振舞わなければ。

でも、あのキラキラの彼だ！

あの彼が目の前に！

ここは彼の家だったのか！

キヤーッ！

気を抜くと、あっという間に我を忘れて有頂天になる自分の頬を、私は自分の手ではたいた。

落ち着け、ばか。

お母さんの仕事の信頼がかかっているんだ。

私を女でひとつで育ててくれた、お母さんの信用だ。

しかし、おばさんらしく振舞うには、
どうしたらいいだろう。

いくら見た目はおばさんみたいでも、私は中身は女子高生・・・だと思いたい。それなのに、お金を貰って家政婦の仕事をしているのだ。ばれたらやばい。

一瞬の間に考えて考えて。

そして、一つのアイデアにたどり着いた。

そして、もう一度玄関先に顔を出す。

「お、お帰りさんしょ。今日はお早いお帰りだね」

お祖母ちゃんの家がある田舎の言葉。

方言を喋れば、この東京では年齢よりは上に見えるのでは、なんて安易な発想だったんだけど。

「あれ？いつもの人と違うんだ」

玄関から上がりながら、満面の笑顔で彼は私の方にやって来る。

見上げるように背の高い彼。

爽やかなその笑顔。

天の川の道路を挟んだ、遠い世界ではなく、

今、ここにまさしく、

私の目の前に。

キヤーッー！

私は彼に背を向けると、もう一度自分の頬を叩いた。

「大丈夫？」

私の様子を見て、頭がはてなマークになっている彼の言葉に、

振り向いて大きく頷く。

「大丈夫っす」

私はマスクの中で、もごもごと呟いた。

「いつもの人は風邪を引いて休みだもので、

私が代わりにきあした。マスク着用を会から言われているので、このままで許してくださいしょ」

目を伏せて私が言っていると、彼はふっと笑った。

「なんか、なつつかしい響きだなあ」

私を見て言う。

「な、何しよう」

「その言葉とイントネーション。懐かしい。

もしかして、同郷かも。おばちゃん、どこ出身？」

おばちゃんと呼ばれて、方言作戦は成功と知るものの、

なんだか、がっかりしている自分もいて複雑な気分になりながら、私はお祖母ちゃんの家のある地名を言った。

「やっぱり、同郷だ。俺の実家も同じ」

彼は言っていると、私の横を過ぎて自分の寝室へと入って行った。

えー！全く訛り無いじゃん！

と驚いていると、私の心境をまるで読んだかのように、

「でも、がきの頃ほんの少し住んでただけで、あとは両親の仕事の都合で、

アメリカが長かったから、方言は喋れないんだけどね」

寝室の方から声がした。

「はあ」

私は頷いた。

寝室の写真を思い出す。

ああいう街に住んでいたのだろうか。

しかし、アメリカが長かったなんて、

さらっと言うところが、また何ともカッコいい。

私は、ほわーっと自分の魂が口から半分抜け出しているのを、ハッとして、ブワッと吸い込んでもとに戻すと、自分の立場を思い出し、慌ててキッチンへと戻った。ぼろが出ないうちに、早く食事を作って帰らなければ。

だけど。

つい気を抜くと、にんまり笑っている自分がいる。

キラキラの彼と、こんなにたくさん話ができるなんて。まるで、夢のよう。

あー、神様。

今まで生きてきて、本当に良かったです。

また我を忘れて浮かれている自分を見つけて、私はキツとなると、

もう一度、自分の頬を今度は両手で叩いた。

「今、風邪流行ってるみたいだね。今日、俺も調子悪くて、部活早退してきたんだ」

寝室の方から、また声がする。

まさか、うちのお母さんのインフルエンザがうつったわけじゃないよな。と、

内心焦るものの、どうか違いますようにと祈った。

サトイモの皮をむく。

時間が無い中での料理は、慣れている。

手際だけは良いと、自分でも自負している。

二日に一回、週に三日の賄い。

なので、一回の来訪で、

二日分の夕食のおかずと、

弁当のおかずを用意するのが仕事だ。

ご飯を炊いたりするのは、仕事内容に無いので、彼がきつと自分でするのだろう。

今日の献立は、

お祖母ちゃんの家で覚えた郷土料理の「ざくざく煮」

これは味噌汁代わりになるし、

根野菜などがたっぷり入っているので、栄養も満点だ。

まるきり偶然だったけど、彼の郷里の料理でもある。きつと二日くらい食べても、彼は飽きないだろうと、奇妙な偶然に、私は嬉しく思った。

そしてゴマを入れた衣で揚げる若鶏の唐揚げと、春キャベツのコールスロー。

明日のお弁当には唐揚げを酢豚風にリメイクしたものに、根野菜の素上げたものを入れて、野菜を多く取れるように作ろうと思った。

私が来ない明日の夕食のためには、豚肉のロースの薄切りを、特性の焼肉ダレにつけてこんで、あとは焼くだけにしておくつもりだった。これなら、弁当のおかずにもなるし。

せっせっせと、今度はちゃんと理性を維持しながら、私がキッチンで働いていると、室内着のラフなグレーの上下のスエットに着替えた彼が、いつの間にか、キッチンの中に入ってきていた。

料理に集中していた私は、ふと人の気配に気がついて流しから振り返り、

丸い椅子をどこからか持ってきて、私のすぐ後ろで腰掛けて、私の手元を、じっと見ている彼を見つけて、

のけぞった。

「お、脅かさないでくだっしょ！」

私は叫ぶように言つと、

「あ、悪い。ごめんなさい」

彼は素直に謝つて、でも笑顔で言つた。

「ほら、普段はどんな風に自分の食事が作られているか、

家政婦さん頼んでも、部活が遅くて様子見られないから、

興味あるってどうか」

あのキラキラの笑顔で、私を見て言う。

ホニヤララ〜となりそうになるのを必死で抑えて、

私は彼から目をそらすと、また料理に戻つた。

「料理の上手い人って、俺の理想なんだ」

彼が言う。

私は振り返らずに、頷いて見せた。

別に良く聞く話だ。

「親の経営している会社を継ぐつもりは無く、

俺は俺の信条に従つて、やりたい事をやるって言ったらさ、

そんなに世の中甘くないって、自分で身を持って知ってみろつてさ、

両親から、こうして田舎から追い出されて、ここで一人暮らししてるわけだけど。

でも、それも高校だけで終わり、

大学は地元に戻るつもりなんだ。

でも、両親との喧嘩の売り口上に買い口上でき、

戻ってくる時に、お前の意に適った嫁さん候補、捕まえられたら、認めてやるって言われてて」

彼が続ける言葉に耳を傾けながらも、手を休めずに、私は料理を続ける。

「俺思ってたんだけど、おばちゃんみたいに、

家政婦を仕事にしている人だったら、

料理を得意にしてる人がたくさんいるわけじゃん？」

私は何が言いたいのかと、ちらりと彼を振り返る。

「家政婦の会に、若い人いない？俺の嫁さんになってくれそうな結構、真剣な彼のまなざしに、

私はマスク越し、笑ってしまった。

「家政婦なんかやってるもんは、皆おばちゃんばかりだわ」

私が言うと、一瞬彼は首を傾げて、

でも頷くと、

「そっか」

小さく笑った。

「年齢の差を気にしなきゃいいのか」

これは本当に小さい彼の呟き。

そこまで本気なの？と、

聞こえない振りをしてながら、

聞こえてしまったこっちが、驚いてしまった。

やがて、全ての料理も仕込みも終わり、

私は彼に向き合う。

「明後日には、また来ます。ほんでは」

ぺこりとお辞儀をして言う私の側で、
彼は私の作った「ざくざく煮」を摘んでいる。

「最高」

親指を差し出して満面の笑顔の彼に、
私の心はとろけた。

キラキラの彼は、天使だと思う。
サトイモをつまむ天使だ。

そして、私も天使だと思う。

私は帰り道、
幼稚園ぶりに、スキップをしながら家に帰った。
地に足がついていなかったのは、
背中に生えた羽のせいだ。

サトイモと、焼肉のたれに漬けた、
豚のロース肉から出来た羽。

一時よりは大分熱も下がった母親は、
2Kのアパートの一室で、布団の上でヨーグルトを食べながら、
テレビのドラマを見て笑っている。

インフルエンザは抜けきるまでに最低一週間くらいはかかるから、
まだしばらくは替え玉作戦をするしかないだろう。

事情を話して、レジのアルバイトをしているスーパーには、
またお休みを貰った。

「ちゃんと薬飲んでよ」

学校から帰ってきた私は、またあの白い割烹着に着替えながら、
母親に声をかけた。

「はいよ」

母親は私に返事をしながら、私を見る。

「なんか、あんたいそいそしてない？」

私が割烹着に頭を突っ込む様子を見て、母親が口を開いた。

「何が」

割烹着の中から、私はわざとぶつきらばうに答えた。

「私は仕方なく、お母さんの代わりに、」

お母さんのお客さんのところへ、掃除とご飯つくりに行くだけよ」

「もしかして、あの部屋の住人に会った？」

私の言葉をさえぎるように、母親が言う。

途端、私の脳裏にあのキラキラの彼の笑顔が浮かんだ。
割烹着に頭を突っ込んだまま、にやけてしまう。

ああ、思い出すだけで、
なんて至福。

今日は彼は部活で遅くて、もしかしたら会えないかもしれないけど、
一回あれだけ会話が間近で出来ただけでも、
一生の思い出になる。
それだけでいい。

・・・けど、
もう一回だけでも、一目だけでも会えるなら、
それに越したことは無い。

多くは望まないから、
自分の想像以上に優しい響きだった（！）あの声を、
たったもう一度だけでも、
間近で聞けるチャンスはないだろうか。
なんて、段々欲張りになっていく自分に、
テへと、小さく声を上げてみたりして。

「ちず」

私は母親の妙に真面目な声色に我に返ると、
割烹着を急いで着て、

「あ、会ってないわよ。帰ってこなかったもの」
冷静を装って言うと、

「そう。それならいいけど」

母親は言って、私からテレビに視線を戻した。

何だかほつとして、私は支度を急ぐ。

だけど、何で彼に会ったらいけないんだろう。

なんとなく口に出せない疑問を、私は心の中で呟きながら、

「行つて来ます」

母親に声をかけて、家を出た。

そう言えば。

私はアパートの古い階段を下りながら思う。

昨日と今日の通学の時間、

道路の天の川の向こうに、キラキラの彼の姿を見かけなかった。

どうしてなんだろう。

ここんとこ浮かれすぎて、あまり気にしなかったけれど、

そう言えば、この間、彼は風邪気味だとか言ってたかった？

何だか胸騒ぎがして、私は急ぎ足で彼の高層マンションに向かった。

途中で食材の買い物をして、スーパーの袋を手提げると、
我ながら、本当におばちゃんだ。

マンションのエレベーターの中の鏡を見て思う。

これで田舎の地方訛りで喋るんだから、本当に完璧。

自分で思ってたくせに、微妙に凹みながら、

私は彼の部屋に向かった。

「お邪魔しまーす」

この間と同じように誰もいないはずの部屋の中に、
玄関から声をかける。

顔にしていたマスクを外した。

ほっと息を吐く。

マスクは息苦しくて、やっぱり嫌いだ。

耳を澄ましても返事がないのは当たり前で、

私は靴を脱ぐと玄関から部屋の中に入った。

さて、掃除、掃除。

と思いながら、リビングへ続く短い廊下を歩いていて、

ふと、寝室の方を見ると、

かすかにドアが開いているのに気がついた。

私は不思議に思っ、て、寝室へと近づく。

きちんと暮らしている印象のある、あのキラキラの彼が、

こんな風に中途半端に、ドアを開けて出かけるような人には思えない。
い。

ドアのノブに手をかけて寝室の中を覗いて、

私は息を飲んだ。

ベッドに、キラキラの彼が寝ていた。

カーテンは閉められたままで、寝室の中は薄暗かったけれど、

ベッドの上の人のシルエットは、はっきり分かる。

あの彼のツンツンヘアーは、

遠目でも、彼の額に汗で張り付いているのが分かった。

目を凝らすと、寝入っているのだろうか、

彼は目は閉じているけど、呼吸は荒い。

私は寝室の中に入り込むと、

ベッドの脇に静かに走り寄った。

汗だくの彼の額に、そっと手を当てる。

「うわ」

私は小さく驚嘆の声を上げた。

尋常じゃない熱だ。

お母さん、

キラキラの彼にインフルエンザ、うつしたな。

絶望的に心の中で呟くと、私はうろたえた。

どうしよう、どうしよう。

取りあえず、彼の頭を冷やして少しでも熱を下げなきゃ。

あと、あと、

母親がかかりつけにしている知り合いの町医者に連絡して、
ここまで、出張してもらおう。
料金は勿論、母親持ちだ。

ああ、彼はいつから熱を出しているのか。

私が帰った一昨日からだろうか、それとも昨日から？

一人暮らしで、

どれだけ心細かっただろうか。

私は彼の心情を思いやって、涙ぐみながら、
でも、思った事を行動に移そうと彼のベッドに背を向けた。
その私の腕が、ぐいっと捕まれ、
私は驚いて振り向く。

「良かった、来てくれた」

具合が悪いのに、辛いだろくに、
彼は、汗でびしょびしょに濡れた顔で、
微笑んで私を見ている。

「遅くなって、ごめんなさい。もっと早く来れば良かった」
私が言うのと、

「何とか、大丈夫」

彼は私に、キラキラと笑って見せた。

「無理しないで、今氷嚢作ってくるから」

言って寝室を走り出て、キッチンの冷蔵庫の冷凍室を開けて、
氷を探して、はたと私は気がついた。

私ってば、マスクもしていない。
方言も使っていない。
思い切り、素だった。
今、気がついたのだ。

私は、まるでムンクの叫びのようになって、
しばし、冷蔵庫の前で立ちすくんでしまった。

冷蔵庫の冷凍室を開けてみると、
氷なんて入ってなくて、

男の子の一人暮らしだと、氷なんていらなかったのかと、
しみじみ生活感の無さを実感する。

とにかく、近所のドラッグストアにでも行って、
熱を冷ますものを、早急に調達してこなければ。

スーパーで買ってきた食材は、取りあえずキッチンに置いて、
私は再び買い物に行くことにした。

ついでに、私が小さい頃からお世話になっている、
かかりつけの診療所のお医者様にも、往診をお願いして来よう。

ポケットから、マスクを取り出して顔にかける。

きつと、寝室は暗かったし、

彼は高熱で朦朧としていただろうし。

というか、何が何でもごまかすしかない。

マスクさえかければ、割烹着着ている私は、

どこから見てもおばちゃんなのだから、

自信を持たなくては。

「そうよ！おばちゃんの変装させたら、

誰も私には適わないんだから！」

天井に向かってガツポーズをしながら言って、

そして、その自分の言葉にまた微妙に凹みながら、

私は彼の寝室に、とぼとぼと戻った。

寢室のドアから中を覗く。

「・・・し、失礼しつぺない」

今度は、方言のイントネーションを忘れない。

というか、大げさに訛ってみる。

やり過ぎくらいに、ど田舎おばちゃん全開テイストで。

「買い物に行ってきたすのし、

ちよぺつと待っててくだし。ぼっちゃん、何かほしいものあるんしょうか？」

マスク越しに、寢室のドアから彼に声をかけると、

「うーんと・・・スポーツドリンクと、プリンが欲しい」

ベッドに横たわったまま、彼は頭だけ軽く上げて私を見て言う。

「有難う、えーと」

そのまま、私の顔を見て彼は動きを止める。

「佐伯・・・だす」

私は自分の苗字を言うと、

「あれ、いつもの人と同じ名前なの？」

彼は汗まみれのキラキラの顔で、意外そうに私を見た。

しまった！つい、母親と同じ名前言っちゃったよ！

「し、し、親戚なのだす」

あわあわと苦しい言い訳をして、

私はごまかす様に続ける。

「けえったら、すぐにおかゆ作りますから。着替えもしねば駄目です」

「うん、有難う」

彼は頷いて、またしんどそうにベッドに頭を戻した。

それにしても、具合が悪いときでさえ、

彼は美しい。

ベッドに横になったまま、大きくため息をついている彼をちらりと見て、

胸キュンの痛みに耐えながら、私は寝室のドアを名残惜しく閉めようとした。

「ねえ、佐伯さん。さっき言葉標準語だったね」

彼は思い出したように言う。

私は目を見開いた。息が止まる。

「い、い、い、今、都会の言葉勉強中なのです。

あまりに訛りが酷いと言葉が通じねえだと、

お客さんから苦情が来てしまうもんで」

ドア越しに何気ない風を装って、私が何とか言い訳を言うと、

「そっか」

彼は納得したようだった。

ヒーーーーッと玄関に向かって小走りになりながら、

私は財布を握り締めて、外に出る。

寿命が縮んだ。確かに三年くらいは縮んだ。

母親が元気になるまでは、
何とか、正体がばれずにやり過ごさなくては。
私はマンションのエレベーターへと走って行った。

額を冷やす湿布薬と、スポーツドリンク、
プリンとゼリー、アイスクリームなどを買いに行きながら、
いつもお世話になっている診療所の先生に往診を頼み込む。
若先生は診療中だったから、
手の空いていた、もうそれはそれは見事に禿げ上がっている老先生
を引き連れて、
私は彼の高層マンションへと戻った。

「きつとお母さんが、うつしちゃったんだと思うんです」
母親がインフルエンザで、今若先生に診療を受けていることを話す。
けれど、ちよつとずれてるマイペースな老先生は、
「ちずちゃん、また今日はずいぶん地味な格好をしているんだねえ」
私の割烹着を見て、ふおふおふおと笑いながら言った。
話、聞け！

でもまさか、今、母親の仕事を代わっているとは言えなくて、
私は苦笑いをした。
「もっと、年相応の格好をしなきゃ、青春がもつたいないぞ？」
老先生は続ける。
「そーですねー」

私は棒読みで答えながら、軽く聞き流して、

老先生を急がせた。

高層マンションを珍しそうにキョロキョロ眺めながら、老先生は私に手を引かれて、彼の部屋へと辿り着いた。

早速彼の寝室に老先生を連れて行き、彼には、知り合いのお医者様に、往診してもらった旨を話す。

「わあ、どうも有難う。今まで具合悪くなったことも無かったから、自分ではどこの医者に行けばいいか分からなかったんだ」
彼がすまなそうに言うのに、

私は片手でいいえと身振りをしながら、首を振った。
うつした、うちの母親が悪いんだから。

診察の間、私はキッチンに行って買ってきたりんごを摩り下ろしている。

しばらくして、老先生が寝室から出てきて、
キッチンの私に言った。

「間違いなく、インフルエンザだね。薬と熱さましを処方しておくから」

私は先生に頭を下げた。

お金を払おうとすると、老先生は首を左右に振る。

「また来た時でいいから。わしじゃあ料金も分らないしの」

「すみません、では次回お伺いした時にお支払いします」

私が言うと、老先生は笑った。

老先生を玄関に送りながら、寢室の前を通るとドアは開いていて、彼が体を起こして先生に頭を下げる。

先生は彼に頷いて見せて、

「ちずちゃん、の彼氏なのかい？」

私を振り向いて、それも結構大きい声で言った。

ノooooooooooooッ！！と心の中で叫びながら、

「んだなわけないだ！馬鹿なこと言わさんな！」

悲鳴のような声を上げて、私は老先生の背中を玄関に押しやる。

彼が首を傾げたような気がした。

「それに、どうして、そんな変な言葉」

ヒーヒーッと、多少乱暴に老先生を玄関からドアへと送り出し、

自分も部屋の外に出て、後ろ手でドアを閉めた。

「色々と事情が、ありまして」

私はドアがきちんと閉まっているのを確認して、老先生に頭を下げて言う。

「今日は本当に助かりました。有難うございました」

エレベーターへと案内しながら、私が言うと、

「青春はいいのう。あれだの、これから彼の看病するんじゃない？」

老先生の老を工口と変えた方がいくらいに、
にんまりと笑って私の顔を覗き見る。

割烹着のおばちゃんルックスの私の看病が、キラキラの彼とこの後、

どんな青春の展開になるんだ！と言い返したいのはやまやま、私はにっこりと笑って、老先生をエレベーターの中に押し込んだ。

エレベーターが無事に地上についたのを見届けて、私は彼の部屋に戻ろうとした。

そして、ぴかぴかに磨かれているエレベーターの扉に、鏡までとはいかなくても、私の姿が映っているのを見つけた。

白い割烹着に三角頭巾、そして口のマスク。
ずんぐりむっくりの150センチの体型に、
美人には程遠い地味な顔。

例え、私がどんなに可愛い格好をしていたって、
キラキラの彼と、青春の展開になる事なんてあり得ない。
そして、また少し凹む。

自分を知り、素直に認めるということとは、
私にとっては、常に凹むことだ。

子供から大人になるというのは、
結局、こういう風に己を知っていくことなのだろうか。
ならば余計、深く考えてもどうしようもないことだ。

さて、
仕事、仕事。

私は頭を振って気を切り替えると、
わざと強い足取りで、彼の部屋に戻って行った。

キッチンに戻ると、摩り下ろしたりんごをガラスの器に入れたもの、プリン、スポーツドリンクなどを持って、彼の寝室に行く。

「失礼しまつす」

ドア越しに声をかける。

「どうぞ」

中から彼の返事があった。

私はトレイを持ったままドアを開け、目を上げて固まった。

ベッドから降りている彼は、着替えているところだったらしく、上半身裸で、こちらに背を向けて立っていた。

「すげー、汗」

私を振り向いて苦笑いをして、

汗でぐっしり濡れている、脱いだばかりのスエットを床に置く。

そして、手に持ったタオルで体を拭きだした。

広い肩と背中、運動で鍛えられているのか、

服を着ている時の印象よりも、はるかに逞しい。

その長身の厚い胸板は、

到底、高校生には見えなかった。

私は思わず見とれてしまつて、

そして、ハッと目をそらした。

マスクの下の自分の顔が、燃えるように真っ赤になるのがわかる。

「悪い、佐伯さん。その引き出しに着替えあるんだ。
出してもらえる？」

彼が私に話しかける。

「着替えですか？」

私の声は動揺からか、思いきりひっくり返ってしまった。

私は彼を見ずに、持っているトレイを慌てて近くのデスクの上に置き、

言われた引き出しから、長袖のＴシャツを取り出した。

「その次の段には、下の着替えもあるから」

し、下の着替え！

それも、私が出すの？

心の中で、ムンクの叫びのようになりながらも、
そうだ、私は家政婦のおばちゃんだったと思い直し、
言われたとおりに、そろそろと引き出しを開ける。

そして、引き出しの中身から目をそらしたまま、
目の端で見て、紺のトラックスと、
スエット生地のパンツを取り出した。

私の手が！

この手が今っ！

キラキラの彼のパンツを持っています！

くらつと眩暈のようなものを覚えて、
私は体が揺れるのを感じた。
神様、どうか鼻血が出ませんように。

顔はますます熱い。発火しそうだ。
真剣にマスクをしてて良かったと思いつつ、
彼の体から顔をそらして、じりじりと近づき、
目を伏せたまま着替えを渡した。

「有難う」

彼はにこりと笑って、私から着替えを受け取る。

「あの、私外に出ますので」

私が言つて、くるりと方向転換をして出て行こうとすると、

「あ、その前にちょっと背中拭いてもらえる？

自分じゃ届かなくて」

彼は無邪気に言つて、私にタオルを押し付けた。

ぎょーーーーっ！と心の中で叫びつつ、
私は手の中に持たされたタオルを見る。
心臓が口から飛び出そうだ。

落ち着け、ちず。

私はおばちゃんなんだ。家政婦のおばちゃん。

おばちゃん、おばちゃんと呪文のように、

心の中で繰り返して、私はタオルを持ち直すと、

ごくりと生唾を飲み込んで、彼の裸の背中に向き直った。

彼も私が拭きやすいように、私に背中を真つ直ぐ向ける。

広い背中……。

ともすれば、ぽやんと魂が口から抜け出そうになるのを、
必死で堪えて、私はタオルを持った手を伸ばす。

恐る恐る彼の背中にタオルを当てて汗を拭き取ると、
タオルを通して、熱が伝わってきた。

まだ相当高熱なのだろう。

私は歯を食いしばり必死になって、自分の心の中に、
おばちゃんという文字の砦を作る。

これ以上、キラキラの彼の存在が私の中に入ってこないように。

「大丈夫？」

ふと、彼が振り向いた。

私は意味が分からず、彼を見た。

「震えてる、まさかインフルエンザ、うつってないよね？」

ふと彼は心配げに言うと、

タオルを持つ私の手を、そっと掴んだ。

途端に、掴まれた手から彼の体の熱が、私の体の中に容赦なく入り込んでくる。

「！」

驚きの悲鳴を飲み込んで、

私は彼の手を振りほどいた。

もう限界です、もう駄目。

「インフルは、うつっていませんけれどもがっ！」

「ご、ごめんなさい。ちよつと失礼します！」

訛ってる余裕すら無かった。

私は彼の前から逃げ出して、
寝室から走って出ると、キッチンへと駆け込んだ。

「落ち着け、落ち着け」

割烹着の上から胸を押さえて、
私はマスクを取って息を整える。

口から心臓は飛び出しそうだし、
真っ赤な頬は、にんまりと緩んでいる。

「ちずの馬鹿っ！」

私は思い切り、自分の頬を叩いた。

「これは仕事なのよ、そして私はおばちゃんなんだから、
しっかりしてよ！」

だって、ここで私が何か失態をしたら、
お母さんに迷惑をかける。お母さんの家政婦としての信用にも傷が
つくのだ。

気持ちを切り替えて、もっとしゃんとしなくては。

そして、もう一度、

私はまるで女子プロレスラーのように、
自分の頬を数回叩いた。

「よしっ、気合注入！」

一声上げて、天井に向かってポーズを決めた。

大分落ち着きも戻ってきて、

今度こそは、もうおろおろしないで彼の看病が出来るだろうと、
私は自分に少し自信が持っていた。

今度もし、キラキラの彼の裸の体を拭く様な機会があったとするな
らば、

老先生の体だと思えばいい。

もしくは、線路の枕木だとか。

うん、そうしよう。

妄想を思い込むのは結構得意だ。

いつも、キラキラの彼を登校時に見かけていた時に、
挨拶を交わすシーンとかを、とてもリアルに妄想していたじゃない
か。

こういう時にこそ、特技は使わねば。

私は一人で呟きながら、うんうんと一人で頷いていた。
外していたマスクを、私はかぶり直す。

けれど、そんなキッチンでの私の様子を、
寝室から走り出して行った私が気になったのか、
着替えを終えて寝室から出て来ていた彼が、
開いていたキッチンのドアの間から、一部始終全て眺めていて、
ぷつと小さく笑いながら、こっそりと寝室に戻ったのには、
私はまるきり、気がついていなかったのだった。

私は彼の寝室に戻ると、

ベッドで横になっていている彼のもとに、

デスクの上に置いてあったトレーを手を取って近寄る。

クッションを背中に敷いて、少し身を起こした彼は、私を見て、熱のある潤んだ瞳に笑みを浮かべていた。

意味深な感じのその彼の笑みに戸惑いながらも、

私はベッドの側に座ると、スポーツドリンクを彼に差し出し、おでこに貼る冷却剤の封を開けた。

「りんごの摩り下ろしと、プリンはお持ちしました。

もし、食欲があるようでしたら、

おかゆもお作りしますけれども」

イントネーションで、微妙に訛りを戻す。

さつき標準語で逃げ出したのだから、

もうあまり強い方言は、今はわざとらしいような気がしてしまっていた。

彼のおでこに保冷剤を貼って、

りんごの摩り下ろしのガラスの皿を手に取り、

私がスプーンで、彼の口に入れてあげようとして、

彼がふっと笑った。

「大丈夫、食べるのくらいは自分で出来るよ」

はたと手を止めて、私は「あ、そうか」と思う。

赤ちゃんじゃないんだから。

あまりに馴れ馴れしかっただろうか、
マスクの下でまた赤面しながら、私は皿とスプーンを彼に渡した。

汗に濡れた彼の着替えを洗濯機に運んで、
キッチンに戻り、おかゆなどを作る。

もう少し食欲が出てきた時のために、
野菜スープを作って、冷蔵庫で冷やしておくことにした。
これは私が幼い頃、母親がよく作ってくれたものだ。

熱のある時に、冷たいスープというのは結構食べられるものなのだ。

洗い終わった洗濯物を干したり、
あれやこれやと仕事をして、

おかゆも出来上がり、すべてが終わったのは、
いつもよりも一時間ほど、時間が過ぎていた。
夕方の7時を回ってしまっている。

母親が何をしているのだろうと思っていることだろう。

小さい土鍋に作った塩味だけのシンプルなおかゆに、
塩こぶと梅干を添えて、お盆に入れて運びながら、
いとまを告げようと、彼の寝室のドアをノックして中を覗く。

薬も効いてきたのか、彼はベッドの上でぐっすりと眠っていた。

そつと近づいて、おかゆのお盆をベッドの側のナイトテーブルに置く。

お盆には、冷蔵庫にあるスープなどの、
お知らせメモも載せてあった。

すぐには立ち去りがたく、

私は静かに、そろそろと彼の眠るベッドの側に正座をして、
彼の寝顔を見た。

長いまつげが頬に影を落としている。

すつと高い鼻筋、広い形のいい唇。

眠っている顔もとても綺麗で、私はしばらくそのまま見とれていた。

ああ、この世には、本当にこんなに綺麗な人っているんだなあ。

私はしみじみ思った。

キラキラの世界の住人は、間近で見てもやっぱりキラキラなのだ。

汗まみれで、具合が悪くても、

やっぱり、キラキラなのだ。

きっと、こういう人を王子様のような人、

なんて呼んだりするんだろう。

あと何日、こうして間近で彼に会えるだろうか。

母親の具合が良くなるまで。

まだ後1、2回は会えるだろう。

でも、それでお仕舞いだ。

私はもうすでに、寂しく思う自分に苦笑いをした。
こうして母親の仕事を手伝う前は、
登校時に遠くから、彼を眺めているだけで満足だったのに。
人間ってのは、贅沢になるのはあつという間だ。

彼の額の冷却剤が、乾き始めているのに気がつき、
帰る前に取り換えて上げようと思った。

新しい物を封を開けて取り出し、
彼の額のものと同つと取り替える。

ふと、彼が目を開けた。

「あ、起こしちゃいました？ごめんなさい」
すまなさそうに私が言つと、

彼は小さく笑つて、私を見た。

「いや、こちらこそ、今日は色々と有難う」

じつと私を見る真つ直ぐな視線に、私は妙にどぎまぎして目をそらすと、

「し、仕事ですから」

何とかマスクの外へ声を押し出した。

「おかゆ、作りましたので、
後で食べられるようになったら、食べてみて下さい。
冷蔵庫には、スープも入っています」

私は何だか、彼の視線に妙に居心地の悪さを感じて立ち上がると、彼に頭を下げた。
訛^{なま}る気力もなくなっている。

「では、失礼します」

胸の高まりを押し殺して、私は寢室のドアへと急いだ。

「あのさ」

彼の声が追いかけてきた。

私は立ち止まって、恐る恐る彼を振り返る。

「佐伯さんさ、俺思ってたんだけど、

ちつともおばさんじゃないよね。

若いし、家庭的でとても魅力的だと思う」

彼が熱にかすれた声で、でもにっこりと笑って言った。

途端、ボワツ！と、私の顔がマスクの下で燃えた。

ど、ど、ど、どういう意味？

「あ、有難うございます」

私は間の抜けた声でお礼を言うと、

もう一度彼にお辞儀をして、

逃げるように彼の部屋を出たのだった。

私は自分の事は、自分で良く分かっているつもりだ。
だから、割烹着を着ている私はどこからみてもおばちゃんだ。
客観的な意味ということでは、それは確かなのだ。

それに、彼の言った「家庭的」というニュアンスは、
家政婦という仕事がらか、または着ている割烹着自体が、
そういう雰囲気をも出し出しているだけで、
そもそも私自身を表す言葉ではないし、
第一、魅力的なんて形容詞は、
私という人間の辞書にはない言葉なのだ。

でも、

「おばさんじゃないよね」
という彼の言葉は、素直に心に響いた。

例えばそれが熱に浮かされた彼の幻覚であつても、
私は素直に嬉しかった。

だって、

「おばさんじゃない」
なんて言葉は、私は自分にだって、
割烹着着た自分には、
到底、言つてあげられない言葉だったからだ。

帰り道の私の足取りは軽かった。

夜道の街頭の明かりが、

いつもよりも、キラキラしているような気がするの
は、きっと気のせいだったのだろう。

でも、私はマスクを取って街頭を見上げると、
そのキラキラに、にっこりと笑った。

私の母親はまだ若い。

私を産んだのが20歳なので、今まだ37歳だ。

身長も私よりも10センチ高く160センチあるし、

顔立ちも私と違ってくつきりしている二重の目、

鼻筋も通っていて、少し日本人離れしているようにも見える。

美人か不美人かといったら、間違いなく美人の方に入るだろう。わが母親ながら、本当にまだまだ魅力的だ。

ちなみに、繰り返すまでもないだろうけど、

私はどっちかっつていうと、不美人の方に入る。

特徴のない顔、ずんぐりむっくりの150センチ。

親子でも似ないもんだ。

そんな魅力的な母親が、

母子家庭で、私を育てるために、

一番女性が輝くとされる20代で、

どれだけ、たくさんの自分の事を我慢してきたのか、

私は知っている。

恋も、自分の幸せも、

全て私のために、母親は凍結してくれているのだ。

それって、本当に凄い事だ。

それに、母親は一度だって、私をないがしろにしたことは無かった。

まあ、祖母の家に預けられる事は多かったけれど、でも、ちゃんと理由があつたし、それに祖母の家は、私にとっては心地のいい場所でもあつた。

だからいつか、私は母の恩に報いたいと思う。母親には、幸せになつて貰いたいと思う。そう心で願いつつ、この年までになった。あと一年で、私は高校を卒業する。

もちろん、私は就職しようと思っている。生活の安定しそうな、三交代の工場の社員とかでもいい。とにかく、一生安定して働けて、母親に心配をかけないような大人になれること。それだけが、私の望みだった。

これは直接母親に聞いたことでは無い。
お祖母ちゃんに、こっそり聞いたことだ。

かつて、母親は家政婦として働いている先の、お金持ちの坊ちゃんと、禁断の恋に落ちたらしい。そして、私が生まれた。

身分違いの恋路がまっとうに続くわけもなく、母親は一人で私を育てることになったそうだ。意地っぱりな母親は、離婚した父親からの経済的な支援を一切断つたらしい。

そんなものを当てにしてい、私を産んだわけじゃないと捨て台詞をしで。

そんな経歴を、私はこっそり知っている。

だから、余計に、

今回の家政婦の仕事の代替では、

キラキラの彼と私は絶対会ってはならないと、

母親は、釘を刺したのだろう。

自分と同じ二の舞を踏んで欲しくないという、

母親の気持ちは痛いほど分かる。

勿論、私は絶対間違いを起こさない。

というか、悲しいかな、

母親と違い、私は間違いを起こせないルックスとも言えようが。

家に帰ると案の定、

規定の時間よりも遅く帰ってきた私を、母親が待ち構えていた。

「遅いじゃない。何やってたの？」

母親は、まだ布団の上にはいるものの、せんべいやチョコやらを食べながら、お茶を飲んで、テレビを見ていた形跡がある。

元気になったのだなとほっとしながら、

私は割烹着を脱ぎながら言った。

「だって、しょうがないじゃない。

お客さん、インフルエンザにかかってたんだから」

私は割烹着を脱ぎ終わると、母親を見る。

「誰が、あの人にインフルエンザうつしたのよ。

どう見ても、お母さんでしょう？辛そうだったわよ、可哀想に」

私が早口で言うと、母親は俯いた。

「あら、やっぱりうつしちゃったか。

マスクしないで、ご飯作っちゃったからなあ」

私はその言葉を聞いて、目を見開いた。

あり得ない。

「それで、あんた。あの部屋の住人と話したの？」

まだ問い詰めるような母親の言葉に、

私は呆れたように上を向いて、

「普通、話するでしょう？」

具合悪くて寝てる人がご主人の、家政婦だったんなら」

私が怒ったように言うと、意に反して母親は面白そうな顔になって、

「ねえ、彼、凄くかっこよかったでしょう？」

言葉を続けた。

一瞬、母親の言葉の意味が分からなくて、私は母親を見る。

「何が言いたいの？」

私の言葉に、黙って母親はじつと意味深に、私を見ている。

「ご心配なく。私なんて魅力ないから、

何事も起こりません」

私の素っ気無い言葉に、

「なら、良かった」

母親は笑って、肩をすくめた。

微妙に傷つく。

自分の言った言葉なのに。

思った以上に、心が痛い。

どうせ、私とキラキラの彼の間になんて、

何事も起こりませんよ。

「ああ、次の明後日から、

私が仕事行くから。もう体調も戻ったしね。

代わりお疲れさま。

あんたのバイト先のスーパーも困ってるでしょう。

あんたみたいに優秀なレジ係が休んでて」

母親があっけらかんという。

まだ、あと最低でも一回くらいは、
間近で、彼に会えると信じていたけど。
ああ、あれが最後だったのか。

一瞬、泣きそうになる。

私は浮かんだ涙を消すように、瞬きをする。

また天の川という名の道路をはさんで、
遠くから、キラキラの彼を見ればいい。

そう自分に言い聞かせながら、
それだけでは、もう満足出来ない自分がいて、
一体、どうやり過ごしたらいいのか、
分からなかった。

忘れるだけだ。
絶望的に心で、呟く。

ただ、もう一度だけ。

私は、母親に隠れてこっそりと、洗濯機に入れた割烹着を隠して持ち出すと、自分の部屋に持ち込んだ。

もう一度だけ、彼に会いたい。

熱の容態も心配だったし、

そして、ちゃんと心の中でも、会って、お別れを言おう。

私は持ち出した割烹着を、

紙袋に入れて、明日カバンと一緒に、学校に持って行く事にした。

授業が全て終わると、

私はトイレで制服から、学校のジャージに着替えて下校した。

すれ違う友人らは、首をかしげて私の緑色のジャージを見て笑っていた。

「どうしたの、ちず」

口々に言われるのに、適当に頷いて見せて、

私はキラキラの彼のマンションへと急いだ。

今日はスーパーのレジのバイトがある。

あまり、時間が無いのだ。

コンビニで彼への差し入れの、

スポーツドリンクとプリンを買う。

そして、通りかかった花屋さんで、

ふと私は足を止めた。

小さなかごにアレンジされてある、ヒマワリが目についた。

キラキラの彼にぴったりの、キラキラお日様の花。

少し迷った後、私は花屋さんに入って、

そのかごにアレンジされたヒマワリの花を買った。

お見舞いだし、いいよね。

家政婦からでも、

きっと彼、受け取ってくれるよね。

自分で一生懸命、前向きな言い訳をする。

でも、本当は病気のお見舞いというよりは、
今までずっと、遠くから彼に憧れてきた私のこの気持ちを、
ヒマワリに託したかったのだ。

決して言葉には出来ないけど、大好きだという気持ち。

だって、実際に近くに寄ってみれば、

遠くで見ていた以上に、彼は素敵な人だった。

私の目に狂いは無かった。

そんな片思いの気持ち。

そして。

お別れの「さよなら」の気持ち。

高校出たら、

三交代の工場で夜勤でもしようかという私なんかと、

こんな高層マンションで一人暮らすような、

お金持ちのキラキラのご子息の彼とでは、

きつともう、再び人生の道が交わることも無いだろう。

彼のマンションに着く。

入り口の暗証番号は分かっている。

でも、鍵は持って来ていない。
家政婦つてのは、依頼人の家の鍵は、
仕事の度に家政婦会から預かってくるので、
当たり前だ。

だから今日、私が彼に会うには、
部屋のドアの横にある呼び出しのチャイムを押して、
ドアまで出てきて貰うしかなかった。

エレベーターの中で、
持って来た割烹着をジャージの上から羽織る。
三角巾もしっかりと被り、マスクもつける。

そして、エレベーターの中の鏡に、
ジャージを着たおばちゃんを見つけた。
緑色のジャージを着たおばちゃんだ。
いるいる、こっぴうおばちゃん。
娘とか息子の学生の頃のジャージを、
もったいないから着てるっていうような。

そして、似合わないヒマワリの小さい花かごを、
抱えているおばちゃん。
私は少し、泣きそうになった。

どうしてもっと、美人に生まれなかったんだろっ。
せめて、母親くらいに。
だったら今日、

マスクなんか、私はかぶらなかつただろう。

でも例え、美人に生まれても、

私はやはり、マスクを脱げなかつたのだらうと思う。
母親が幸せになるまでは、

私は自分で幸せになるまいと、誓っていたから。

彼の部屋の前行く。

そして、呼び鈴を押した。

一回。

二回。

そして、ドアが開いた。

「あれ？」

声がする。

私は顔を上げた。

「佐伯さん、今日は仕事無いよね？」

キラキラの彼が、ドアを押し開けたまま、
私を見て驚いている。

彼の顔色は、大分いい。

その格好もシャツにジーンズで、
寝込んでいたという感じではなかった。

私はほっとして、

「熱、どうですか？」

明るい口調で尋ねた。

「うん、おかげさまで、

今日は、微熱程度まで下がったよ。

佐伯さんが、呼んでくれたお医者さんがくれた薬、

本当に良く効いたみたい。有難う」

彼は笑った。

キラキラと、空気が色を変えた。

「これ、お見舞いです」

私は持っていたコンビニの袋に入ったスポーツドリンクとプリン、
そして、ヒマワリの花かごを差し出す。

「うわ、すごい」

彼は、ヒマワリのかごを見て、
嬉しそうに言った。

少なくとも迷惑そうでなかった。
それだけで、嬉しかった。

「ほんの気持ちですから」
私はマスク越し、笑顔になった。

今までの私の想いも、浄化されたような気がした。

「明日から、またいつもの担当に戻ります。」

「ご不便をおかけしました」

私はぺこりと頭を下げた。

彼の動きが止まる。

「え、そうなの？」

私は頷いた。

何故か、お互いの間に沈黙が流れる。

私は異常に居心地が悪くなって、

「ほんでは、さえなら！」

方言になって言いながら、頭をぺこりと下げると、彼の前から急ぎ足で離れた。

「ねえ！」

彼の声が追いかけてくる。

私は聞こえない振りをして、

丁度降りる人がいて、

扉を開いたエレベーターに飛び乗ったのだった。

あれから母親が仕事に復帰し、
全てがもとに戻った。

私は週に三回のスーパーのレジのバイトに戻り、
そして、毎日の楽しみも、
朝の登校時の道路という天の川の間を行く、
キラキラの彼を見ることに戻った。

すっかり回復したらしい彼は、
サッカーボールなどを手にして、
友達らとふざけながら、学校に通っていた。

まるで近くで会話した事が嘘のように、
私が彼の傍にいられた日は、幻になった。

これでいいんだ。

そう思う自分がいながら、
まるで腑抜けたようになってしまった自分もいるのは事実だった。

時間だけが見方なのだろうと思う。
幻が自分の中から消えるのを待つのだ。

そのまま一週間ほどが過ぎた日、
ホームルームも終わり、下校の時間になると、
私はカバンに教科書を詰めて、帰り支度をしていた。

教室を出て、校舎を出る。

校門の近くで、私は先に帰ったはずのクラスメイトに腕をつかまれた。

「ちず！まさか、あんた彼氏いたの？」

好奇心に目を輝かせたクラスメイトの言葉に、
私は首を傾げる。

「は？」

まるで外国語を聞かされたように、
私はぽかんとする。

「待ってるよ、あんたのこと。超イケメン」
そのクラスメイトは校門を指差して、
にやりと笑った。

「何で、そのイケメンが、私のことを待ってるなんて言うの？」
クラスメイトを振り返って、苦笑いをして訊く。
有り得ない。

きっとその人は、他の誰かを待っているんだろう。

「だって、この学校で佐伯っていったら、あんたしかいないじゃん。
この学校に佐伯さんいる？」って聞かれたから、
私、今連れてきますって答えたのよ」

クラスメートはあっけらかんと答えた。

まさか。

私は急に高鳴ってきた鼓動を感じながら、
校門へと歩いて行った。

県立の地味な紺の制服達がぞろぞろと下校をしている中で、
校門に寄りかかりながら立っている、その超お金持ちの子息令嬢が
通う学校の、
デザイナーズの臍脂のブレザーは、
通り過ぎる誰もの目が覚めるかのように、目立っていた。

すらりと高い背、広い肩幅をしている彼は、
そのブレザーをさりげなく、でもモデルのように着こなしながら、
校門に背を預け、カバンを小脇に抱えながら、
持っているサッカーボールを手持ち無沙汰に、
指先でくるくる回していた。

ツンツンヘアー、あの端整な横顔。
キラキラの彼だった。

少し戸惑って、
でも、佐伯と名指しされたのだったら、
きつと彼は私を待っていたのだろう。
ならば、もう逃げずに対面するだけだ。

「あの」

私は校門から出ると、彼に声をかけた。

マスクもしていない。
割烹着も着ていない。
素の私だ。心もとないこと、この上ない。

私が背の高い彼を見上げると、
キラキラの彼はボールをいじる手を止めて、
私を見た。
見る見るうちに、笑顔になる。
辺りの空気が、キラキラと色を変えた。

「会えた！」

彼は満面の笑顔になったまま、無邪気に言う。
「どうして、ここが分かったんですか？」
私は心もとないまま、小さい声で訊いた。
「もとから働いてくれている佐伯さんには、
いくら君の事を聞いても教えてくれなかったから、

もう会えないのかもしれないと思ってたんだけど、
ほら、あの緑のジャージ。

ひまわりをくれた日に、君が着ていたジャージ。

この間交流戦した相手のチームが同じジャージ着ててさ。

その相手チームは、この学校のチームだったんだ」

彼は持っているサッカーボールを見て言った。

「佐伯さんが、おばちゃんじゃないのは分かってたから」

面白そうに、私の顔を覗き込んで言う。

「もしかして、この学校の生徒なのかもと思ったんだ」

私は目を伏せて、頭を深く下げた。

「高校生のくせに、事情があるとはいえ、

親戚の家政婦の仕事を代わったこと、

心からお詫び申し上げます。もう二度としませんから、

どうかご内密にして頂けませんでしょうか」

母親の仕事がかかっている。

ばれるような事をしてしまったのは、私の落ち度だ。

私の悲痛な言葉を聞いた彼は、あははと笑った。

「そんな事、気にしてないよ。

というか、おかげで君に出会えたわけだし」

意外な彼の言葉に、私は顔を上げた。

「ちょっと、話があるんだ」

次第に辺りに集まりつつある野次馬に目をやって、

彼は私に言った。

「はあ」

私が頷くと、彼は私の手を取って校門から離れたのだった。

自分の手を握る彼の手を見下ろして、
心臓が口から飛び出そうになる。
一体、これは何なのだろう。
くらりと眩暈も起こっている。
私はフラフラしながら、彼に連れられるまま後について行った。

しばらく歩いて、人の少ない公園に入った。
彼は私の手を離して、私に向き直る。

「名前、佐伯さんの下の名前、なんて言うの？」
彼が言った。

何でなのだろうと思いつつも、
私は答える。

「ちずです。佐伯ちず」

彼は笑顔になった。

「ちずちゃん」

どきりと再び、心臓が飛び上がりそうに鼓動を打つ。
キラキラの彼が私の名前を呼んだ！

「俺の名前は、ひろせあきひろ広瀬彰浩。

改めて、よろしく」

彼は言った。

「ひろせあきひろ・・・さん」

そうか、キラキラの彼の名前は、
『ひろせあきひろ』さんだったんだ。

なんて素敵なお名前だろう。

あきひろさん。

彼にぴったりのキラキラのお名前だ。

もう意識が朦朧としてしまうほど、
私は舞い上がっていた。

「ちずちゃん」

ふと、彼が私を呼ぶ。

私はのぼせたような、

ぼーっとした間抜けな顔で彼を見上げた。

「俺と付き合ってくれない？」

私はそのまま、ポカンと彼を見上げていた。

彼の言葉の意味が、

私が自分の中で、租借されて理解できるまで、
たっぷり一分はかかってしまったのだった。

キラキラの彼、

ひろせあきひろさんは、

にっこりと笑って、その高い身長で私を見下ろしていた。

言われた言葉の意味が、ようやく分かると、

私は咄嗟に彼に背を向けて、

夢なのかと思って、自分のほっぺたをつねってみる。

「痛っ！」

力を入れてつねったせいか、洒落にならないくらい痛くて、私は涙目になった。

じゃあ、やっぱり本当だったんだ。

彼が私に交際を申し込んでくれたのは。

体中の血が逆流して、全て頭に遡っているようだ。

ああ、神様。

こんな夢のような事って、

生きていさえすれば、

冴えない私にでも、起こるものなんですね。

私は心底、人生という予測不可能なサプライズなイベントに、こうして、参加出来ている事を幸せに思った。

もう、十分。

これだけで、今後の私の残りの人生、何も起こらなくても、もう二度と恋が出来なくても、もう、本当に十分だった。心から、そう思った。

でも、この後自分が起こそうとしている行動は、私の心を引き千切りそうだった。

もう本当に今度こそ今後は、二度と、彼と間近で話をする事が適わなくなるだろう。

でも、私は自分の恋よりも、母親のことを取りたかった。

母親が私を一人で育ててくれた間、何度ひっそりと、母親が泣いている姿を見ただろう。

私は母親が幸せになるまでは、
自分の幸せなんて求めないと誓ってきたのだ。
その自分の信念を实践するだけのこと。

でも、体が震えた。

口も舌も、まるで自分のものではないように、
その言葉を言うのを拒んだ。

でも、ようやく私はどうにか口を開く事が出来た。
本当はもっと、あっけらかんと言いたかった。

でも、両目からは涙があふれてしまつて、
どうすることも出来なかった。

だから、私はもう涙にはかまわず、
なるたけ口の端を上げて、平静を装う振りだけでもしようと思った。

「ごめんなさい」

ただ一言。

そして、私は頭を下げた。
もつと何か言いたかったけれど、
それだけを言うのがやっとだった。

私と彼の間に、沈黙が流れる。

「彼氏、いるの？」

キラキラの彼が、沈んだ声で言った。

私は、彼のその沈んだ声色に驚いて顔を上げるけれど、でも、何も言えなかった。

もちろん、彼氏なんているわけもないけど、でも、否定してもしょうがないことだ。

私が黙っていると、彼は、

ひろせあきひろさんは、目を伏せて口の端に小さく笑みを浮かべた。

「残念だったな。ちずちゃんの彼氏が見つける前に、

ちずちゃんを見つけたかった」

キラキラの彼から、キラキラが消えてしまったことに、私はびっくりしていた。

どうして、そんな悲しそうなの？

彼は大きく息を吐くと、

私を見た。

「じゃあ」

サッカーボールを抱えなおして、

彼は私に背を向けて歩き出した。

「さよなら」

彼の背中に声をかける。

でも、きつと小さくて、

彼には聞こえなかったかもしれない。

さよなら。

私は心の中で自分に言い聞かせるように、
もう一度、呟いていた。

あれから静かに時間は過ぎた。

私は学校に登校する時間を早めていた。

もう道路という天の川の向こうの、

キラキラの彼の姿を見ることがやめていた。

私の通う学校は、彼に知られている。

道路の反対側を、その高校の制服の生徒がたくさん歩いているのだ。

彼の目に、私が留まってしまうかもしれない。

それはきつと、彼にとって不愉快に違いない。

第一、

彼からの交際の申し込みを断った私には、

もう彼に憧れる資格なんてないのだ。

道路のこちら側から、彼にあこがれ続けるなんて、
ずうずうしいにも程がある。

学校とスーパーのレジのバイトの日々は、淡々と過ぎていく。

やがて大型の連休になると、

私は気分転換に祖母の家を訪ねることにした。

連休中は祖母の家に泊まりに行つていいかと訊くと、

母親は、快く承諾してくれた。

キラキラの彼のいる町から離れれば、

少しでも彼の事を忘れられるかと思つたのだった。

祖母の家は、私が自分を偽るために、

あの時、彼に話していた方言の田舎だった。

私がお祖母ちゃんの家に行くと、必ず遊びに行く場所がある。
「久しぶりだの。ちずちゃん、何か大人っぽくなったなし」
良子おばさんは、笑って言った。

良子おばさんは、お祖母ちゃんの家のご近所で、
一人暮らしのお年寄りや体の不自由な人に食事を届ける、
小さいNPO法人を立ち上げている人だ。
利益度外視で、人のために働いて喜んでいる聖人のような人。
母親に祖母の家に預けられた幼いころに知り合って、
私が一番尊敬する人だった。

大きな鍋から湯気が上がる。

「今日はざくざく煮だあか」

私はその鍋を覗き込んで言うと、

良子おばさんは鍋の中をおたまでかきまわしながら笑った。

「ちずちゃんは、ここの方言がうめえな」

「好きなのだ」

私が答えると、良子おばさんはまた笑った。

「高校を卒業したら、こっちに来ようかな」
ふと、私は呟く。

「そしたら、良子おばさん。

私をここで使ってくれる？料理は上手いほうだと自負してるよ？」
良子おばさんは大きく頷いた。

「ちずちゃんみたいな働きもんだったら、いつでも歓迎だ」
その言葉を聞いて、私の中でさっきの自分の呟きが、
リアルに胸に迫った。

キラキラの彼を忘れる去るには、
いい選択肢かもしれない。

彼のいる都会を離れる。

それに、一人暮らしをしている祖母と同居をして、
その上、人の為になる仕事をしているなら、
母親もきつと、私に対して安心するのではないだろうか。

「私の甥っこも、高校を卒業したら東京からこっちに戻ってくるんだ。」

こっちの大学に通って、ゆくゆくはここを継ぐんだと。
自分の親の会社を継がないで、金にならねえ叔母の仕事を手伝う
ってんだから、

変わってるべ？でも、自分の甥っ子ながら、本当にいい子なんだ。
ちずちゃんみたいないい子と一緒になってくれたら、それこそ最
高なんだがな」

良子おばさんは、からからと笑う。
私もつられて笑った。

良子おばさんの甥っ子さん。
それもこのNPO法人を継ごうなんていう、奇特な人だ。
もし望まれれば、お嫁さんになりたいと素直に思う。
もう、私は恋はしないだろうから。

「あれ、いいとこに来た。ちずちゃん、今話してた甥っ子、
今遊びに来てるんだ。紹介するわ。あきひろ！ちよっとこっち来

な」

良子おばさんの言葉は、私の上を素通りした。
理解出来なかった。

心がフリーズしていた。

まさかと思う事すら無かった。

私は良子おばさんの言葉に、ゆっくりと振り向いた。

調理場のドアを開けて入って来た人が、
顔を上げる。

それは、あのキラキラの彼だった。

彼と私は、お互いを見る。

どちらも、しばらく言葉を失っていた。

「あきひろ、前から話してただんべい？そのサクさんとお孫さん。」

高校卒業したら、ここんどこで働いてくれるなんて言ってるから、

お前、お嫁さんに貰ってここんどこを継いでくれよ」

良子おばさんは言って、アハハと笑う。

何だか私はいたたまれなくなつて、顔を伏せた。

「駄目だよ、良子叔母さん。ちずちゃん、困ってるじゃん」

キラキラの彼は苦笑して言った。

思つたよりも明るい彼の声に、私は顔を上げる。

ああ、あの笑顔だ。

私の心がとろけそうになった。

あの道路の天の川の向こうでいつも見ていた笑顔。

「何だ、お前ら知り合いか？」

意外そうに良子おばさんが言う。

「ちよつとね、でもここにいるなんて、
超びつくりしたけど」

キラキラの彼が言った。

「私もびつくりです。まさか良子おばさんの甥っ子さんが」

彼を見て言葉が途切れてしまう。

キラキラの彼が、私の言葉を拾つたように続けた。

「サクさんとお孫さんが、」

良子叔母さんのところによく手伝いに来てくれているって、
話は聞いてたし、とても働き者でいい子だとも聞いてたけど、
その子がちずちゃんだつたつてのは、非常に納得だよ。

残念だな、ちずちゃんに俺のお嫁さん候補になって貰えなくて」

彼の言葉に、良子おばさんが首を傾げる。

「なして、駄目なんだ？」

「だって、良子叔母さん。俺、ちずちゃんに振られてるんだ。

ちずちゃん、他に彼氏がいるんだから」

良子おばさんが目を見開く。

「そうだったのか、そりやすまなかった」

彼氏なんているわけがない。

私にとって、一生に一回あるかないかの大嘘だ。

地獄で閻魔様に舌抜かれるのが決定したな、と心の中で呟いた。

その後、数分雑談をする間、

私はなんとか耐えられた。

裕福な家に生まれた彼が幼い頃暮らしたアメリカでは、

富んでいる人もたくさんいたけれど、

路上で暮らすような貧しい人も多くて、彼には相当ショックだったらしい。

ホームレスに施しをする教会のボランティアなどに進んで参加したりして、

日本に戻っても、直接地域や人のためになるような仕事がしたいと決めていたのだから。

ああ、そういえば、彼の部屋の外国の景色で人が並んでいるあの写真は、

ホームレスの人たちが食事を振舞われている写真ではなかったか。彼の決心の表れなんだろう。

そして、キラキラの彼と良子おばさんは、
良く似た価値観をしているのだ。

人のために生きようとする尊い価値観。

ああ、やっぱりキラキラの彼は本当に素敵な人なんだ。

「大学卒業してここを継ぐときは、
この村だけじゃなくて、県全域に活動を広げられるように拡大していきたいんだ」

法人の将来の展開を目を輝かせて話す彼に、私は見とれた。
そして、ハッと我に返ると、用事を思い出したと言って、
私は祖母の家に戻ったのだった。

良子おばさんとキラキラの彼が、少し寂しそうに見送ってくれたのは、
きつと気のせいだ。

私のこの辛い気持ちこそそう思わせただけ。

「彼に会わないようにするには、

もう、おばあちゃんの家にも来れないな」

私は小さく呟くと、浮かんだ涙を指で拭い、
唇をかみ締めて顔を上げた。

自分の決めたことだ。

もう何にも感じるな。心を止めてしまえ。

私は祖母の家から、

母親の待つ家へと戻って行ったのだった。

了（前書き）

この最終話をどりさん（ID 129632）に捧げます。

了

いつものように、
また日々は続く。

スーパーのレジのアルバイトが終わって、
私は一通り見切り品コーナーを見て回って、
値段が安くなっていたりんごを一袋手にとり、
購入して家に帰った。

夕食の後、食器の片づけを進んでやり、
食卓でくつろいで雑誌を見ている母親と一緒に食べようと、
買ってきた見切りのりんごの皮を流しでむく。

包丁を握る自分の手に、
いつもより力が入らないような気がする。
私は首をかしげた。
りんごの赤も自分の手の中にあるのに、
まるで遠くに見えるような感覚。

おばあちゃんの家から帰って来てから、
何もかもがぼやけて、いつもよりも遠くにあるように感じる。
心で感じることをやめると、
全ての景色はこんな風にぼんやりしてしまうものなんだと、
私は頭で考えていた。

「へえ、今どきの高校生は、
一年生での初体験が20パーセントで、
三年生になると、過半数超えるんだって。
進んでるわねえ」

母親が雑誌を読んで感嘆したように声を上げる。

なんちゅー記事を読んでるんだ。

私は呆れて、母親に背を向けてりんごをむきながら、
目をくるりとまわした。

もちろん、今の言葉に対して私はノーコメントだ。

「ねえねえ、ちず。あんた彼氏とかいないの？」

母親は面白そうな口調で、今度は直接私に声をかけてくる。
私はりんごをむく手を止めて肩を落とした。

スーパーのレジのバイトと学校以外に、
どこにも行かないこの生活を見れば、
私に彼氏がいるかどうかなんて分かんと思うのだけれど。

「ねえねえ」

しつこく、テーブルから体を乗り出すような雰囲気で母親は続ける。
私は首だけで母親を振り向くと、つつけんどんに言った。

「毎日真面目にどこにも寄り道せず、

バイト先のスーパーで、

見切りのりんごなんかを買って帰ってくる高校二年生に、
彼氏がいるように思える？」

母親は唇を尖らせる。

「まーね。ちずは今時の女子高校生って感じでもないしね」
肩をすくめて、また雑誌に目を戻した。

私が今時の女子高校生じゃないってのは、

母親には似ていないちびでずんぐりむっくりの、

おばちゃんのようなこの容姿の事を言っているんだろうか。

かちんときて、

私は包丁を持ったまま母親に向き直ると、

「っていったって、付き合ってないだけで、

私だって、男の子に告白されたことはあるもん！

付き合って下さいって」

喧嘩腰の強い口調で、私は母親に言う。

母親は雑誌から顔を上げた。

「へえ」

目を丸くする。

「ねえねえ、どんな子なの？」

再び、母親は面白そうな表情になってテーブルの上に身を乗り出して、

聞いてきた。

私は母親から目をそらすと、

「……すごくカッコいい、違う学校の同じ学年の男子」

ゆっくりと流しに向き戻って、りんごの皮むきを再開する。

「背も高くて、スポーツマンで逞しくて、

いつもキラキラ光ってるような笑顔で、本当に素敵な人」

最後の方の言葉は呟くように小さくなった。

彼の顔が私の頭に浮かぶ。

良子おばさんのところで、少し寂しそうに私を見送った、あの彼の顔。

「なんで、あんたそんなかつこいい子と付き合わないの？」

母親が素っ頓狂な声を上げる。

「何でって」

私は振り向かず言い訳を探した。

まさか、母親が幸せになるまでは、

私は誰とも恋をしたりしないと決心してるなんて、面と向かって言えるわけがない。

「悪いけど、あんたのその今時でない凹凸のないスタイルや器量で、贅沢は言ってられないでしょう？」

ましてや、かつこいい子なら大歓迎じゃない」

あまりにもストレートな母親の言葉に、

私はなんだか拍子抜けして、今度は苦笑する。

「だって、お母さんが会うのも駄目だって言ってた、

あのマンションに住んでいる男の子なんだもの。

ほら、家政婦の仕事を代わって私が行った高層マンションで一人暮らししてる」

私が苦しい言い訳を探して言うと、母親は目を見開いて、

「あの金持ちのボンボンか！そりゃ、断って正解。

ガキのうちから息子にあんなに贅沢三昧させてるような金持ちの家のボンボンには、

大体ろくなのがないからね。その上、家政婦の仲間に若い子いたら紹介してくれなんて、

気持ち悪い事言ってくるような子だもの、
だから、あんたに会わせたくなかったの。却下で正解」
母親はぶっきらぼうに言って大きく息をつくと、
雑誌に目を戻した。

「彼のこと、悪く言わないでよ！」
気がつく、私は母親に怒鳴っていた。
今度は冷静で強い怒りだった。
驚いた母親がワンテンポ遅れて、
ゆっくりと顔を上げる。

包丁とりんごを持ったまま、
母親を再び振り返って、私はすっかりとした口調で続けた。
「彼はお母さんが思ってるような、そんなボンボンなんかじゃない！
学校を卒業したら、世の中の人のためになる仕事をしようって
いう立派な人よ。」

何も知らないくせに、彼のことを悪くいうなんて許さないんだから」
早口で言い切った私を、母親は黙って見ている。
言葉を失っているようだ。

「大体、お母さんがお金持ちの子息にそんな偏見を抱いているのって、
お父さんがお母さんが言うような、馬鹿でろくでもない金持ちの
息子だったからでしょう？」
家政婦に手を出して妊娠させて捨てたお父さんのせいなんでしょう？」

私が怒鳴って続けると、

母親は目を見開いてしばらく私を見た後、黙って目を伏せた。

気まずい空気が私と母親の間に流れる。

そういえばこの話は聞いたことを内緒にするという約束で、おばあちゃんから聞いた話だった。

母親は雑誌を読むでもなく、

ただ目を落としている。

その表情は特に変わらないけれど、

私の言葉に傷ついているのだけは分かった。

「……ごめん」

私は頭を小さく下げて言う。

母親は何も言わなかった。

私はまた流しに向き直って、りんごをむき続ける。

もう高校を卒業したら、

私だって大人だ。

今まで私がしてもらって来たように、

大人になったら今度は母親を守ろうとしている私が、
こうして母親を傷つけてどうするんだ。

沸いてきた自己嫌悪に私は反省した。

「ねえちず」

ふと母親の声がする。

そして、椅子を立ち上がりこちらにやって来る気配がする。

「その子からの交際の申し込みを受けなかったのは、

まさか、お母さんに遠慮してたせいなんてことがあるの？

私がお父さんに出会った境遇に似てる人だったから？」

言いながら母親が近寄ってきて私の背後に立つ。

私は小さく首を振った。

「そんなことあるわけないじゃん。単に好みのタイプじゃなかっただけ」

ふと、私を覗き込んだ母親が悲鳴を上げた。

「ちずっ！」

叫んで私の両手から包丁とりんごを取り上げる。

「何？」

私は母親の顔を眉をひそめて見た。

「あんた、血だらけじゃないっ！」

母親が叫んで、乾いたフキンをつかみ私の手を押さえる。

不思議に思っ、私は自分の手を見下ろした。

いつの間に切ったのだろう。

何箇所かの傷口から、結構大量の血が流れていてぽとぽとシンクの中に落ちていた。

「あれ？まるきり痛くないから分からなかった」
私は呟く。

「一体どうしたの？」

母親は私の傷口を押さえながら、私の顔を覗き込んで震える声で言う。

「それにどうして、あんた泣いてるの？」

私はゆっくりと母親の顔を見る。

「泣いてる？私が？」

言っている私の口の脇を、生ぬるいものが走りあごを伝わってぽとりと下に落ちる。

途端に手の傷がずきりと痛んで、私は顔をしかめた。

「ねえ、お願い。」

話をしよう、ちゃんと。もうお母さんもちずに何も隠さない。

だから、ちずも私に何も隠さないで。

お互いに大人同士として、全部ちゃんと話をしようよ」

母親が言って、私の手を強く握る。

その目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

私も母親の手を握り返して、小さく頷いた。

母親は父親とのことを全て、

出会いから別れまで何でも隠さず話してくれ、

私が理解できないようなことは、

何回も噛み砕いて、納得するまで説明をしてくれた。

そして、いつでもお父さんに会いに行っても良いとも言ってくれた。

今の私はまだお父さんに会いたいとは思わないけど、

いつかそんな気持ちになったら、正直に母親に言おうと心に決めた。

キラキラの彼との事は、

私が最初勝手に憧れていた道路の天の川の向こうでの出会いから、この間おばあちゃんのご近所さんの良子おばさんの所で、偶然に会ったところまで、彼との出来事の全てを母親に話した。

そして、母親に対してずっと抱いてきていた、

シングルマザーで苦勞をさせて申し訳ないという気持ちと、

高校を卒業したら、今度は私が母親に幸せになってもらうように努力する気持ちまでを、

すっかり隠さずに話した。

母親はしばらく、両手で顔を隠すように押さえて黙っていた。

「お母さん？私、なんか悪いこと言った？

つらい事思い出させた？」

私が母親の顔を手の下から覗き込むようにして言うと、

母親は手をぱつと離れた。

涙でぐしゃぐしゃに濡れている顔で、母親は笑った。

「あんたは、本当に優しい子だ」

聞きなれない手放しの母親の褒め言葉に、私は面食らって、そして照れた。

「優しいかどうかは分からないけど、今の私がこうしていられるのは、

全部、お母さんのおかげだから」

照れくさいけど、これは正直な私の気持ちだった。

いつの間にか、私の目からも涙が溢れる。

悲しい涙ではなく、温かいぬくもりのある涙だ。

お互いにぼろぼろ涙を流しながら、でも微笑みあった。

誰かがこうして本気で自分の事を思ってくれているということは、愛してもらえているということとは、なんて温かいんだろう。そんなことを思った。

「ただ一つ、あんたの勘違いがある。

私はシングルマザーで不幸だなんて、一回も思ったことは無いよ？ そりゃ生きてれば日々何かしらあるから、落ち込んだり苦しんだり、

泣いたり喚いたりすることもあるけど、私は不幸だなんて思ったことは一回もない」

きつぱりと言い切る母親の言葉に、私は息を飲んだ。

「それに誰だって、本当に幸せになりたいと思うのなら、自分の力でしか幸せになんてなれないしね。

だから、あんたが一生懸命私を思ってくれる気持ちは嬉しいけど、あんたが私をあんたの言う意味での幸せには出来ないのよ。

早い話、自分の恋人は自分で見つけるってこと。

だって、娘のあんたに恋人になってもらうわけにいかないでしょう？」

母親が笑うのに、つられて私も笑った。

「だけど、この年になってしみじみ思うのは、

一体人生の中で、何回好きになれる人に出会えるのだろうかって事よ。

お母さんの年になると良くわかるけど、本当に好きになれる男の人って、

そうそう簡単には見つからないものよ？

その上、その自分が好きになった相手が自分の事を好きになってくれるなんて、

もうそれこそ奇跡みたいなもの」

うつとりと言うつ母親の言葉を、私は口の中で小さく繰り返す。

「……奇跡」

「誰にも先の事なんて分からない。

でもただお母さんが自信を持って言える事は、

私はあんたのお父さんと出会って、

お父さんを好きになって、全く後悔はしてないってこと。

それだけは本当の気持ちなの。

結局別れてしまったけど、あんたも授かったわけだし。

だからちずにも、自分の人生に起きる全ての事に対して、

向かっていく時はどんな結果になってもいいから、

お母さん、後悔だけはして欲しくないな。

あんたがそういう生き方をしてくれることが、

何よりお母さんは嬉しい」

今はもう涙も乾いて、すっきりとした笑顔で母親が言った。

私も涙を拭いて、満面の笑顔になって大きく頷く。

「有難う、お母さん」

私が素直に礼を言くと、母親は照れて肩をすくめながら、

血の止まった私の手の傷を手当てするために、

救急箱を取りに立ち上がった。

次の朝、通学路。

道路の両脇の歩道を、

ぞろぞろと制服姿の高校生たちが登校していく。

母親のあの言葉が、

今の私の胸にある。

「後悔だけはしないように」

そわそわと学生カバンを抱えながら、

私は一人歩道の脇で佇んで道路という名の天の川の向こうを眺めている。

やがて、ずっと憧れ続けていた彼の姿が遠くから見えてきた。

友達らと、笑って話をしながらやって来るキラキラの彼。

包帯だらけの手で信号機のボタンに手をかける。

そして少し迷った後、私はエイツと押した。

彼がこちらに近づいて来るのを見守っていると、
信号は赤から青に変わる。

私は思い切って走り出すと、
キラキラの彼に向かって天の川を渡り始めた。

キラキラの彼　　了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1235t/>

キラキラの彼

2011年11月5日20時31分発行